
機動戦士ガンダム ～託された未来～

雷紋寺 音弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム ～託された未来～

【Nコード】

N4288L

【作者名】

雷紋寺 音弥

【あらすじ】

宇宙世紀0079。

地球連邦政府に宣戦布告したジオン公国は、新兵器であるMSの力を利用して着実に地球降下作戦を進めつつあった。

ユーラシア大陸への侵攻を完了し、次なるジオン軍の攻撃目標はカリフォルニア。MSを持たない連邦軍は、戦闘機と戦車の大隊で敵を圧倒する作戦に出る。

戦場における兵器の移り変わりと、時代の移り変わりを肌で感じるパイロット達。彼らは戦場で、何を見るのか……。

宇宙世紀0079。

ジオン公国が地球連邦政府に宣戦を布告して、既に二ヶ月。

先のルウム戦役にて勝利を収めたジオン軍は、次なるステージとして地球降下作戦を実行に移した。ブリティッシュ作戦の影響による異常気象にも救われ、ジオン軍は連邦軍に気づかれることなく偵察部隊を降下させ、現地での兵器運用データを入手。これによりMSを地上で運用するノウハウを得たジオン軍は、半ば奇襲に近い形でロシアのバイコヌール基地を占拠。次いで、資源採掘基地であるオデッサ鉱山基地の占拠にも成功する。

これにより勢いを増したジオン軍は、北米一帯の占拠を目的とした第二次地球降下作戦を開始する。南米の連邦軍本部に攻撃をかけるための、足場を作ろうという目論見だ。

だが、連邦軍も、みすみす彼らに北米を明け渡すほど愚かではなかった。先の第一次地球降下作戦の報を受け、連邦軍はカリフォルニア基地を中心に戦力を集結。ジオン軍の侵攻に備え、臨戦態勢を取っていた。

連邦とジオン、そのどちらに属する者達も、新たな決戦の日が近いことを予感していた。

三月十一日、地球連邦軍カリフォルニア基地。

その日、連邦軍のカリフォルニアベースは、ジオン軍のMS部隊による急襲を受けていた。第二次地球降下作戦により地上に降りたジオン軍と、それを迎え撃つ連邦軍の戦いは、誰もがジオン優勢に事が運ぶはずだろうと思っていた。

だが、戦いの行く末はジオン軍の撤収という思わぬ結果となった。先のルウム、オデッサの戦いがあまりにあっけなくジオンの勝利となったため、MSという兵器のアドバンテージを公国軍側が多少過信していたこともあるだろう。しかし、それ以上に連邦軍の航空機部隊を中心とした爆撃が、ジオン軍のMS部隊に打撃を与えたことが大きかった。

地上戦では部類の強さを誇るMSも、空中からの攻撃にはやや非力である。そのため、フライマンタを中心とした爆撃機によって足止めを食らわせたところに戦車砲の集中砲火を浴びせるという連邦軍の戦術で、多くのMSを失う結果となってしまった。

もともと、連邦軍側の被害も少なくはなく、数多くの航空機や戦闘車両が戦場の藻屑と消えた。そして同日、敵の撤退したことを確認し、連邦軍は残存部隊をカリフォルニアベースに引き上げさせる。無傷での勝利ではない以上、一刻も早い部隊の再編と補充が必要だったからだ。

そんな中、明らかに部隊から外れた航路を飛ぶ一機の戦闘機の姿があった。その翼は片方が折れ、ところどころから白や黒の煙が噴出している。装甲版もあちこちはがれ、とても戦える、いや、まともな飛ぶことができる状態ではない。

それにも関わらず、その戦闘機はふらつきながらもカリフォルニアベースを目指して飛行を続けていた。ふらふらと、まるで蝶や蛾のような飛び方ではあるものの、一向に墜落する気配がない。パイロットの超絶的な操縦技術が、機体をなんとか保たせているのだろうか。

「よし……。見えてきたな……」

半壊状態の機体のコックピットで、パイロットがつぶやいた。声からして、どうやら女性のような声だ。

「たのむから、最後まで大人しく飛んでいなさい……」

かろうじて生きている計器の様子を確認しながら、徐々に高度を落とす。時折、ガクンという衝撃と共に、あらぬ方向からGが加わり、冷やりとする。が、それでも彼女はしっかりと機体の中に浮かし、バランスの崩れをなんとか立て直す。

「高度確認……着陸準備開始……」

眼下に映る基地の滑走路を確認し、彼女は機体をゆっくりと傾けた。が、その時、コックピット内に警報が鳴り響く。思わず画面を確認した彼女は、忌々しく舌をうって毒吐いた。

「——っ！！ 今更、前輪が故障して出ない！？ それに、V-TOLEも使用不能！？ まったく、ここまで来て、どうしてこんな——！！」

怒りの感情に任せ、思わずパネルに拳を叩きつける。だが、そん

なことをしても状況は変わらない。仕方なく彼女は操縦桿を握りなおし、胴体着陸の準備に入る。

「こんな状態で腹擦りして大丈夫か……？」

胴体着陸は緊急時の着陸方法として挙げられるものの一つだが、その成功率は極めて低い。原因は、胴体が地面と擦れることによつて起こる摩擦熱により、機体内部の燃料に引火する可能性があるからだ。また、それ以前に着陸に失敗した時点で機体がバラバラになり、そのまま炎上してしまう可能性もある。

もつとも、ルウムの戦いを生き抜いてきた彼女にとって、そんなことは些細な問題でしかなかった。例えば半壊状態の機体であっても、手足のように操ってきたのだ。今回も、自分の腕を信じて着陸すればよい。

機体と地面が擦れる嫌な音がして、彼女を乗せた戦闘機は基地の滑走路に文字通り滑り込んだ。後には機体が擦った跡と思われる黒く太い線が残り、機体の各所からも煙が上がっている。

「つと……。これは、ちよつとヤバイか……」

機体が止まったことを確認し、パイロットの女性は慌ててコックピットを飛び出した。周囲にいる他の兵士が不安そうに見つめる中、彼女は機体を捨てるようにして飛び降りると、目の前の兵士に向かって猛然と走り出す。

帰還してくる戦闘機の誘導を行っていた兵士たちが、啞然とした様子で彼女を見つめたときは、既に遅かった。タックルを食らわせるかのようにして、半ば強引に二人の男を押し倒すと、彼女はすか

さず頭を抱えて叫んだ。

「伏せろ！ 爆発するぞ！」

刹那、鈍い爆発音と共に、彼女の乗っていた戦闘機は大破した。赤黒い煙に巻かれ、あちこちに部品を撒き散らすその姿は、まるで断末魔の砲口をあげているようだ。

「間一髪つてところか……」

愛機の大破する姿を眺めながら、パイロットであつた女性が静かに呟いた。今までに蓄積していたダメージのせいか、機体はそこまで大きな爆発を起こすことも無く、半ば崩れ落ちるような形で燃えていた。

「あ、あの……。これは……」

訳が分からないといった様子で呆然としている誘導員の様子に気づき、パイロットの女性は、ようやく気がついた様子で振り返った。

「ああ、帰還報告が遅れたな。北米方面軍、カリフォルニアベース駐屯部隊所属、リサ・スメラギ中尉だ。第二エリア防衛の任より、ただ今、帰還した」

炎上する戦闘機を背景に、パイロットの女性は形だけの帰還報告を済ませ、滑走路を後にした。

同日、カリフォルニアベースにて。

休憩所と思しきスペースで、先の戦いから帰還した連邦兵達が束の間の休息を得ていた。第二エリアの防衛部隊を中心に連邦軍は多くのMSを撃破したが、同時に被害も甚大であった。生還を喜ぶ者、戦友の死に悲しみを隠せない者、負傷しつつも生き残り、次なる戦いに闘志を燃やす者と、実に様々だ。

そんな休憩所の片隅で、数人の兵士が飲み物を片手に話をしていた。見たところ、二十代前半になるかならないかといった年齢。恐らく、軍に入って間もない新米のパイロット達だろう。階級章から判断するに、佐官クラスの間人は誰もいない。士官学校を出たばかりの新兵と、志願兵達の集まりである可能性が高かった。

「おい、フリッツ。今日の滑走路での話、聞いたか？」

長身で短髪の男が隣にいる金髪の男に尋ねた。

「ああ、聞いたぜ。爆発寸前のセイバーフィッシュで帰還した、凄腕のパイロットの話だろ？」

「そうさ。しかも噂によると、そいつはすげえ美人の女パイロットって話だぜ」

「おいおい、マジかよ、それ！」

「マジもマジ、大マジさ。しかも、その人の部隊は生き残りが一人もいなかったって話だから、今度の部隊再編成では別の隊の隊長を務めるかもしれないって話だ」

「そりゃ、願ってもない話だな。そんな美人のエースが隊長なら、俄然やる気になるってもんだぜ」

「おいおい……。なにも、まだ俺たちの隊に、その人が来るとは限らないだろ？ お前は相変わらず、女のことに關してはおめでたいやつだな」

先ほどの激戦から帰還したとは思えない同僚の態度を見て、短髪の男は思わず肩をすくめてため息を吐いた。

「うるせえ、ロツソ！ お前こそ、いつも氣取っているふりして、本当は自分が一番期待しているんじゃないのか？」

「生憎、俺はお前と違って、現実主義者なんですね。高嶺の花は見て楽しみ、自分の手で摘むのは素朴な野花ってのが調度いいのさ」

「やれやれ……。自分から話をふつておいて、相変わらず氣障な野郎だぜ。なあ、お前もそう思わねえか？」

そう言いながら、フリッツと呼ばれた金髪の男は、隣にいる同僚に声をかけた。その背丈はフリッツやロツソよりも一回り小さく、年齢も一段と若い。志願兵か、それとも学徒兵なのかは分からないが、二十歳になっていない可能性も高かった。

「あ……。すいません、何の話でしたっけ……」

唐突に話を振られ、その若い兵士は呆然とした表情で口にした。先ほどから隣で話されていた内容は、あまり聞こえていなかったらしい。

「おいおい、アラン……。お前、さっきの話、聞いてなかったのか？」

「すみません。少し、考え事をしていたので……」

「なんだよ……。相変わらず、お前は無愛想なやつだな。もう少し、こう……。他人に興味とか持てねえのか？」

「持てないわけではありませんよ。でも、今はちょっと、そんな気分になれないだけです」

そう言つて、アランと呼ばれた青年は、無言のまま休憩所を去つていった。後に残されたフリッツとロッソの二人は、怪訝そうな表情で顔を見合わせている。

アラン・スオード。

彼は地球連邦軍の中においては、少々変わった存在だった。戦闘機、戦闘車両ともに、操縦するための技術は高いものをもっているが、若手にありがちな過剰な自信は全く見えず、常に何か思いつめているような言動や行動が目立っていた。部隊の仲間からは時に哲学者と揶揄されることもあるくらい真面目ぶりで、酒にも女にもギャンブルにも興味がなかった。

しかし、一方で軍規にうるさいのかといえ、そのようなこともなかった。部隊の仲間が羽目を外していても、それを咎めることもせず、かといって自分が羽目を外すこともなく、ただ傍観しているだけである。正に、心ここにあらず、といった様子だ。

当然、そんなアランの評価は当然のことながら取り立てて素晴らしいものではなく、可も無く不可も無い平凡な兵卒と見られていた。同期で彼の腕を良く知るものからは、もっと自分をアピールするようになられたこともあった。が、しかし、今の彼にはそんなことはどうでもよかったのである。

休憩所から自室へ戻ると、アランはそのままベッドに大の字になって寝転んだ。目をつぶれば、先のジオンの侵攻を食い止めた戦いの様子が、ありありと浮かんでくる。

緑色の迷彩色に身を包んだ鋼鉄の巨人が、巨大なバズーカやマシンガンを構えて突撃してくる。放たれた弾丸を食らった戦車が、まるで玩具のように簡単に吹き飛んでゆく。ジオン公国の保有する最新兵器、MSに対して、連邦軍の兵器の中に単体で対等に戦えるものは存在しない。

爆発と煙が大地を覆う中、彼は自分を乗せたセイバーフィッシュを巧みに操り迫り来るトップを果敢に迎撃する。戦闘機と戦闘機の戦いであれば、自分はまだ互角に戦える。

ふと見ると、友軍のフライマンタの爆撃によって足を止められたMSが、戦車の一斉射撃によって撃破されてゆく。脚部を撃ちぬかれた敵機、ザクと呼ばれるMSは、そのまま力なく大地へと崩れ落ちる。

だが、自軍の奮闘するその光景は、アランにとってはむしろ虚しく映った。たかだが一機のMSを倒すのに、いったいどれだけの戦闘機の援護爆撃と戦車の砲撃が必要だったのか。撤退してゆく敵の姿を見て喜ぶ友軍の声さえも、今の彼には滑稽に思えて仕方が無い。

鋼の巨人を集団で囲い込み、一斉砲撃によって撃破する。これではまるで、B級の特撮映画にある怪獣退治だ。火力に任せて叩き潰すだけなど、とてもまともな作戦とは思えない。

今回はこちらが守る側、相手が攻める側だったから、集団戦法を使つて勝つことができた。しかし、これがもし、自分たちが攻める側だったらどうなるか。アニメの世界から飛び出したような、とんでもないパワーを持った何体ものロボットに守られている敵の基地に飛び込んで、今の連邦軍の兵力で敵うのだろうか。

敵を追い払うだけでは戦争は終わらない。いつかはジオンに奪われた地上の拠点を取り返し、彼らの勢力を宇宙へ押し戻さねばならない。それができない以上、この戦争は上層部が思っている以上の泥沼と化すだろう。そんなことを考えると、アランは今日の勝利さえも、簡単に喜ぶことができなかった。

翌日、部隊の再編成に伴い、カリフォルニアベースの兵士たちは、それぞれが新しい部隊へと移動していった。昨日の戦いで部隊の人間を失った者どうしが集まり、新たな小隊を結成する。はつきり言つて寄せ集めなのだが、この際贅沢は言っていられない。今日か明日にでもジオンの地上部隊が侵攻してくることを考えると、のんびりと構えている時間はなかったのだ。

再編された部隊をまとめるため、基地のそこかしこでは、新たに小隊長に任命された者が隊の人員や作戦における役割を確認していた。そんな中、今回の部隊再編成を一際喜んでいるもの達もいる。

アランの同僚である、フリッツ・ウェルナーだ。

「本日より、この小隊を任されることになった、リサ・スメラギ中尉だ。以後、よろしく頼む」

「おいおい、マジかよ。今まで野郎ばかりでむさ苦しかったこの隊に、まさかこんなに美人の小隊長さんが来るなんてよ!!」

リサの紹介が終わると同時に、フリッツが子供のようににはしゃいだ。何しろ、ただでさえ暑苦しい男たちが多い軍隊である。女性士官が上司になったと聞いただけで、彼のような反応を示すものは少なくない。同僚のロッソもフリッツの様子を半ばあきれた表情で見ているものの、実際はまんざらでもなさそうだ。

「既になから報告は聞いている。フリッツ・ウェルナー少尉、ロッソ・ライアン少尉、アラン・スオード曹長。以上の三名が、私の指揮下に入るということで間違いはないな」

「ええ、そりやもう。俺は中尉のような人の下で戦えるんなら、死んでも構いませんよ」

「おいおい、フリッツ……。いくらなんでも、死んじまったら全てがパーなんじゃないの?」

「例えの話だ、例えの!! 俺だって、ジオン野郎相手にこんなところであつたばるつもりはねえぞ」

「なら、いいんだが……。どうもお前は、時々どこまでが本気なのかわからないことがあるからな」

「現実主義者のお前には、俺の考えてる男のロマンなんてのは分かんたろうさ」

フリッツが、淡々とした口調で話すロッソを鼻で笑って見せた。対するロッソも肩をすくめ、やれやれといった表情で溜息を吐いた。そんな部下たちの様子に呆れながらも、リサは声を荒げて話を続けた。

「お前たち、少しは私語を慎まないか！！　それだけ余裕があるというのなら、この後、少し私につき合ってもらおうぞ」

「いいですねえ。俺でよかったら、どこまでもお供しますよ。もっとも、この基地には洒落た店の一つもないみたいですけどね」

「勘違いをするな、フリッツ少尉。私がつき合ってほしいのは、フォーメーションの確認を含めた演習だ。新しいメンバーを指揮して戦う以上、互いの癖や戦い方を知っておかねば、戦場ではばらになるぞ」

「そりゃ、ごもつともで……」

「異論がないのであれば、解散後、第八格納庫へ集合しろ。我々のために新しく用意された機体があるそうだ」

「新しい機体？　セイバーフィッシュじゃないんで？」

「詳しくは、演習前に話す。では、各自解散後、所定の場所にて再度集合せよ」

「了解であります、隊長！」

威勢のよい声を張り上げ、やや大げさに敬礼をして答えるフリッツ。その様子に苦笑しながら、ロツソとアランも無言で敬礼をする。周囲は先に解散したと思しき他の隊の人間が、あちこちへ忙しなく移動を開始していた。

カリフォルニアベース第八格納庫。

何機もの戦闘機が並ぶその場所は、フリッツやロツソ、そしてアランたちにとっては見慣れた場所だった。いつもはここに彼らの愛機であるセイバーフィッシュが並べてあるのだが、今日はその姿がどこにもない。代わりに置いてあるのは、全身にいぶし銀のようなカラーをまとった鋭角的なフォルムの戦闘機だ。

「隊長、この機体は？」

「形式番号FF-6。ハービック社の開発したTINコッドだ。空中での対戦闘機格闘戦能力を強化してある機体だぞ」

「ほう、そりゃ心強いすな。ジオンの連中の戦闘機は、やたらチヨコマカ動きやがる。それに対抗できるっていうんなら、ありがてえ」

目の前の戦闘機を期待に満ちた目で見つめながら、フリッツが叫んだ。

ジオン軍の使用する戦闘機は機動性の高いものが多い。偵察機ではないルッゲンでさえ、場合によっては新米のパイロットにとつての脅威となっていた。

また、揚力には頼らずバーニアの推力のみで飛行できるドップは、例え翼を破壊されても飛行し続けることが可能である。そのため、普通の戦闘機とは別次元のタフさが問題とされていた。現に一部の連邦兵からは、空飛ぶゴキブリなどと揶揄されていたほどである。

「今から、こいつの試運転を兼ねて演習を行う。各自、それぞれの機体へ搭乗せよ」

リサの命令で、フリッツとロツソの二人は素早く自分にあてがわれた機体へと乗り込んだ。それを見たリサも後に続こうとするが、そのとき、ふと視線を感じて後ろを振り返る。

「どうした、アラン曹長。何か言いたいことがあるのであれば、出撃前に言っておくべきだぞ」

「あ……いえ……。なんでもないです……」

「そうか。だが、戦場で迷いは死につながる。演習とはいえ、余計なことを考えていては実戦で命取りになるぞ」

「はい、大丈夫です」

「ならば、お前も早く自分の機体に乗れ。のんびりしている時間はないぞ」

「了解しました……」

感情のこもらない無機質な声で答えると、アランは足早に自分の機体へ向かっていった。その後姿を見たりサは、どこか釈然としない気分ながらも、すぐに彼の後を追って機体へ乗り込んだ。

その後の演習は、問題なく進んだ。初めの頃こそリサは部隊のメンバーの相性を気にしていたが、それは無用の心配だった。

ともすれば軽率なフリッツと、現実主義者のロツソ、基本的に忠実なアランの三人は、一見して馬が合わないように思われる。が、しかし、それは全く見当違いだということを思い知らされたのだ。

基本的なフォーメーションは、リサを戦闘に右翼をフリッツが、左翼をロツソが固める形だ。しんがりはアランが務め、討ち漏らした敵の掃討や後方からの支援を行う。三機ではなく四機で編隊を組むことで、生存率をより高めようという戦術だ。

リサが感心したのは彼らの連携ではなかった。時に彼女は彼らを試すつもりで、ともすれば無茶と思われる急旋回やスライスターンを繰り返した。が、三人の内の誰一人として欠けることなく、彼女の動きについてきたのである。これには流石の彼女も驚きを隠せないでいた。

ほどなくして演習を終え、彼女と三人の男たちはカリフォルニアベースへと帰還した。偵察部隊からの報告では、ジオン軍の再侵攻

の兆しは今のところ不明のようだ。今日は何事もなかったが、明日にでも侵攻が再開されるかもしれないことを考えると息つく暇もない。

そんなことを考えながらヘルメットを脱ぐと、格納庫の奥で言い争う兵士の姿が見えた。目を凝らして見ると、どうやら自分の隊のメンバーらしい。

「だから、さつきから何度も言っているじゃないですか！　こんな戦闘機だけで、本当にこの戦争に勝てると思ってるんですか！？」

フリッツに食い下がるようにして怒鳴っているのはアランだ。先ほどまでの物静かで無愛想な様子はなく、まるで人が変わったかのように激しい口調でまくし立てている。

「こんな戦闘機とはなんだよ、こんな戦闘機とは！　こいつの機動性、お前だって分かっているだろう？　こいつなら、ジオンのゴキブリ戦闘機どもだって敵じゃねえ。近づくやつから蜂の巣にしてやるってもんだ」

「僕が言っているのは、そんなことじゃありません！　戦闘機や戦車をたくさん集めたところで、所詮MSには敵わないって言っているんです！」

「何言ってるやがるんだ、お前。MSなんて、デカイだけのただの的じゃねえか。現に、昨日の戦いだって、ジオンの一つ目どもを何機も落としただろうが？」

「数と火力に任せて、強引に叩き潰しただけじゃないですか！　こんな戦いを続けていたら、今に僕たちは全滅しますよ！」

「なんだあ！？　もしかしてお前、びびってやがるのか？　ちつとは骨のあるやつかと思ってたが、どうやら俺の勘違いだったみたいだな？」

「勘違いで結構です！！フリッツさんには、僕の考えてることなんて、分かりっこないですよ！」

「ああ、分かんねえよ！！少なくとも、お前みてえな臆病者の考えてることなんぞはな！」

「——っ！」

フリッツのその言葉が決定打となったのか、アランは顔を真っ赤にしてその場を走り去っていった。リサが現れたときは既に遅く、彼は格納庫の外に飛び出した後だった。

「いったい、何があったんだ？」

状況が飲み込めないまま、リサは残されたフリッツに向かってたずねた。

「どうもこうもねえですよ。演習が終わってからこの機体……TI Nコッドの良さについて語ってたら、いきなりあいつが突っかかってきやがったんですよ」

「原因もなく、他人に突っかかる人間はいないだろう。フリッツ少尉、君の発言に何か問題があったとは考えられないか？」

「めっそもないですよ、隊長。どうして俺が、そんなこと言われ

なきやなんのです?」

「そうか。ならば、もういい。アラン曹長とは私が話をつけてくるから、お前たちは命令あるまで自室で待機している」

「ですが……」

「これは命令だ。このままでは、演習と同様に息の合ったフォーメーションを次の戦闘で行うことが難しくなる。チームの不和は、隊長である私が解決すべきことだ」

そう言うと、リサはフリッツとロッソを残し、そのままアランの後を追って格納庫を飛び出していった。残されたフリッツは面白くなさそうな顔をして、同僚のアランに愚痴をこぼす。

「まったく、なんだってんだよ。俺がいったい、何したって言うんだ? なあ、ロッソ……」

同意を求めるようにして振り返るフリッツ。が、そんな彼の態度とは反対に、ロッソは険しい表情でフリッツを見つめていた。

「フリッツ……。お前は、アランの同期の話聞いたことがあるか……?」

「同期……?」

「あいつがこのカリフォルニアベースに来る前、俺たちと隊を組む前は、あいつはルウムで戦っていたらしい」

「ルウムだと!? あの年でか!?!」

「そうだ。もともと志願兵の集まりでしかなかったルーキー連中だったそうだが、あいつは優秀だからな。同期の中でも同様に優秀な連中と、宇宙で初陣を飾ることになったのさ」

「で、結果は？」

「酷いも何も、全滅だよ。隊長を含め、同期の連中も全員が撃墜され、生き残ったのはあいつだけだったらしい……」

「……………」

ため息混じりに話をするロツソの表情を見て、さすがにフリッツも黙った。

既存の連邦軍の兵器とMSの決定的な戦力差。それを仲間の死という現実で見せ付けられたからこそ、アランはMSの脅威が分かるのだろう。そして、それはフリッツ自身も薄々感づいていたことではあった。仮に自分が戦闘機でMSと単機で対峙した時、勝てる保障は無いに等しい。

「なあ、フリッツ……。あいつは俺たちよりも若いし階級も下だ。それに、俺たちと違って、士官学校のような大それたものも出ちゃいない。だけど、俺たち以上に今の連邦軍が置かれている状況を理解し、それを受け止めているのもまた、あいつなんじゃないか？」

上の連中は暢気に構えているみたいだが、実際に戦場で戦うのは俺たち兵士だ。実戦経験が少ないとはいえ、俺たちや上の連中とは見てきたものが違うからこそ、あいつの話にも説得力があると思えるんだがな……」

「そりゃ……そいつは、分かっているけどよ……。それでも、俺は認めたくねえんだよ。地球圏各地に拠点を持つ連邦軍が、ただか一つのサイドの規模しかないコロニーの軍に、戦争ふっかけられて負けちまいそうだったのが……」

ロツソの言っていることが分からないフリッツではなかった。確かに、ジオン軍のMSの性能は特筆すべきものがある。ルウムの戦いでそれを見せ付けられたアランの話も、的についているのだろう。

だが、それでも彼は認めたくなかったのだ。その事実を認めてしまえば、どうあがいても自分たちに勝機がないことになってしまう。それを認めて、心が折れないという自信はなかった。

第八格納庫から程なく離れた一角で、リサはアランの姿を見つけた。いつもは物資の搬入を行うための船が着く港だが、今は人も少なく閑散としている。

「となりに、失礼させてもらっよ……」

無言のまま海を見つめるアランの横に、リサは静かに腰を下ろした。

「いったい、何があったのか、説明してもらえらるうな？」

返事はない。アランは先ほど同様に、無言のまま海を見つめている。その表情に先ほどの口論で見せた激しさは無く、いつもの思

いつめたような表情に戻っている。

「まったく……。お前は若手の中でも優秀なほうだと聞いていたが、先ほどの口論はなんだ？ 同じ隊の中であのようなことが続いては、今に戦場で命取りになるぞ」

「どうも……。すみませんでした……」

ぼそりと呟くような声で、アランはリサと目を合わせずに言った。相変わらず、その目は海の向こうを見つめている。このまま彼を問い質そうとも思ったが、これではどうにももちがあかない。仕方なくリサは、今度は少し砕けた口調で彼に話しかけた。

「よければ、なぜ口論になったのかを話してくれないか？ 何か思いつめていることがあるのであれば、相談に乗るぞ」

「いえ……別に……」

「あれだけの言い合いをしていて、何も無いはずはないだろう？ それとも、私では相談するのに頼りないかな？」

「そ、そんなことはありません！ ただ……」

「遠慮はいらんぞ。こう見えても私は、現場からの叩き上げだ。お前たち前戦で戦う者の気持ちも、少しは分かっているつもりだぞ」

アランにとって、それは意外な一言であつた。

リサの年齢と階級を考えれば、普通は彼女が士官学校を卒業したエリートだと思うことだろう。おそらく、まだ二十代であろうパイロット、しかも女性が、未だに男尊女卑の旧態依然とした伝統の残る

連邦軍で中尉にまで昇りつめることなど珍しいからだ。

「すみません……。自分は中尉が、てっきりエリートの出だろうと思っていましたので……」

「まあ、お前が驚くのも無理は無いだろうな。私も別に、今の階級を欲して手に入れたわけではない。親戚に軍関係者のコネがあつてな。私の叔父にあたる者なんだが……その人の口添えで、今の階級を手に入れたようなものさ。本当なら今頃は、フリッツ少尉やロツソ少尉と同じような立場か……もしくは君と同じくらいの階級のはずだよ」

「そうだったんですか……」

「まあ、私自身は、そこまで気にしてはいないがな。実際に戦場へ出れば、階級なんて関係なしに死ぬときは死ぬ。本当に大切なのは、パイロットとしての腕さ」

「ええ、それは分かっています」

「話が分かるやつだな、お前は。で、それよりも先ほどの話だ。お前はなぜ、あそこで仲間と口論になった？ 私でよければ、理由を話してくれないか？」

「実は……」

先ほどと比べ、幾分か緊張が解かれたのだろうか。アランも今度は、素直に話をする気になったようだ。

「あの時、自分はMSとの戦闘について、フリッツ少尉と話をし

ていました」

「MSとの戦闘？」

「はい……。ジオン軍の使用するMSは、単機では連邦軍の戦車や戦闘機を凌駕する性能を持っています。それに対し、今は物量戦で対抗していますが、それがどこまで続けられるのかと……」

「なるほど。それでフリッツ少尉は、お前のことを臆病者などと言ったのだな。だが、連邦とジオンの国力差を考えれば、この戦争の行く末は、おのずと分かるのではないか？　いくら強力なMSを揃えようと、地の利はこちらにある。万能の兵器でも、作れなくなればそれでおしまいだ。地球に拠点を構える我々は、ジオン以上に物資面で余裕があるはずだぞ」

悲観的な表情を崩さないアランに対し、リサは苦笑しながら答えた。無論、それが気休めだということは彼女も分かっている。

ジオンは既に地球上にある連邦軍の拠点をいくつか占拠し、月面のグラナダやソロモンなどの要塞を中心に、宇宙での足場も確保していると聞く。既に敵は一つのサイドではなく、宇宙のあちこちから虎視眈々と地球を狙っているのだ。それが分かっているだけに、今のリサには自分の言葉にどこか後ろめたさを感じた。

「確かに、今は連邦軍の方が優勢でしょう。しかし、敵は既にオデッサ鉱山基地を占拠したとも聞きます。このままジオンが採掘した資源を本国に送り続け、どんどんMSを生産されれば、その時は……」

「そ、それはだな……」

言葉が出なかった。自分の言動の裏を見透かされたような指摘。命令通りに戦うことを糧として生きている者や、何かを信望して血気に逸るだけの志願兵の言葉ではない。士官学校を卒業しているわけでもないというのに、その若さでそこまでの指摘ができることがリサには意外だった。

「隊長は今のままで、本当にこの戦いに勝てると思っているんですか？」

「そうだな……。正直、そこまで考えたことはなかったよ。だが、戦場では迷っている暇は無いぞ。勝てると思っていなければ、勝てる戦いも勝てなくなる」

「ナンセンスですよ、それ。今時、根性論なんて……」

「では、お前はどつするべきだと思うのだ？」

「僕は……僕は、連邦軍も、一刻も早く戦闘用のMS開発に着手すべきだと思っています。兵器の戦力差がなくなれば、国力は連邦の方が上です。そうなれば、もうジオンの一つ目なんかを恐れる必要はありません。これ以上、無駄に死ぬ人が出ることもないはずなんです」

「なるほどな。それを言っつて、フリッツ少尉と意見の違いが生まれたと言っわけか……」

「正直、馬鹿にされることは分かっていました。でも、それでも自分是我慢できなかったんです……。ルウムと、それに先日の戦いで、たくさんの仲間が死にました。もし、あの時彼らが乗っていた

のが、戦闘機や戦車ではなくてMSだったなら、あそこまでたくさんの人が死なずに済んだはずなんです……」

「……………」

「僕たちは……僕たちは使い捨ての消耗品じゃありません。戦闘機や戦車ならいくらでも作ることができますけど、死んだ人間は帰ってきません。だったら軍は、パイロットの生存率も考えた戦い方を考慮すべきなんじゃないですか!？」

「それは……確かにお前の言うとおりだが……」

「結局、上の人たちは、僕たち志願兵のことなんてどうでもいいんですよ。食いつ持を求めたり、自分の正義に従ったり……。志願した理由はそれぞれなんでしょうが、前戦に送り込まれるのは、いつもそうだった志願兵ばかりです。士官学校を卒業したエリートたちは、ある程度階級が上がると同時に前戦を抜けて、後方で指揮したり新型機のテストをしたりしているばかりじゃないですか。それに、ここ最近の作戦では、たくさんの兵力を送り込むだけの力技ばかりだ。多くの損失が出たとしても、勝てれば良いとさえ思っている。僕たちのことを、消耗品のパーツとしか思っていない。違いますか……?」

反論の余地はなかった。コネで中尉の階級を手に入れたりサ自身、それは何よりも自分が実感していたことだった。叔父がリサに中尉の階級が手に入るよう立ち回ったのは、そのことも理由に入っている。今の連邦軍の中に士官学校を卒業したエリート組と、志願兵からなるそれ以外の組の間に、列記とした差別があるのも事実だ。

彼らは志願兵たちを金のかからない消耗品と考えている一方で、

自分たちは極力死なないような立場に身を置くことが多かった。その理由は実に単純であり、士官学校という金のかかる機関を通して養成された優秀な人材が、簡単に死んでしまつてはこまるということだった。まったく、とんだ拝金主義だと、現実を知った時には辟易したものだ。

だが、それを知るからこそ、彼女はあえて前戦で戦う道を選んだ。身内のコネで与えられた階級に甘んじて、自分だけが安全なところであぐらをかいているのが嫌だったからだ。本当は大尉へ昇進する話もあつたのだが、さすがにそれは断つた。自分の意に反して階級をもらつても、全く嬉しくはない。そのようなことがあつたからこそ、リサにはアランの気持ちがよく分かった。

「お前の言いたいことは分かったよ。確かに、もっともな意見だ」

「すいません、生意気なことを言つて……。けど、どうしてもこれだけは言っておきたかつたんです。そうでもしないと、ルウムや昨日の戦いで死んだ仲間たちが、あまりにも不憫で……」

「まったくだな……。我々が消耗品扱いされているということに関しては、私も同意見だ。だが、私はフリッツ少尉の言いたいことも分かるような気がするな」

「えっ……」

「確かに連邦軍がMSの開発に成功すれば、戦局を大きく変えられるかもしれない。既に水面下では、開発が進められているという噂も聞く。だが、仮にMSの開発に成功したとしても……私がMSに乗ることはないだろうな」

「ど、どうしてですか！？ 戦闘機や戦車じゃ、ジオンの一つ目に敵わないんですよ！？ このまま戦い続けたら、いつ死んでもおかしくないんですよ!？」

「そんなものは、戦場にいれば何に乗っていても同じさ。それに、お前のように、これからの可能性が限りなく残されているパイロットならいざ知らず、我々のように戦闘機一筋で戦ってきた者はどうする？ 強力だからという理由だけで使用する兵器の機種転向を言われたところで、正直、うまく扱える自信はないな……」

「そ、そんな……。 たったそれだけの理由で……」

「私たちは、お前のような先進的な兵士から比べれば、ロートルつてことなのさ。実戦で戦えるかどうかでことじゃなく、物事の見方や考え方、それに順応性などの面においての話だ。軍なんかに身を置いて、同じ兵器ばかりで戦い続けるとな…… 思っていた以上に石頭になってしまふものなんだよ」

「で、ですが……」

「気にするな。上の連中も、いずれはMSの重要性に気づくことだろう。そうなったとき必要なのは、お前のような柔軟な思考のパイロットだ。だから、今は生き残ることだけを考えている」

「はい……。 どうも、ありがとうございました……」

「なあに、少しは吹っ切れてもらわんと、こちらとしても困るからな。ジオンの連中が再び攻めてくるのは、今日とも明日とも限らないのだからな」

そう言いながら、リサは目の前に広がる雄大な海から青空へと目を移して仰いだ。空は、自分が誇りをかけて戦ってきた場所だ。今度の戦いでも、その誇りにかけて戦おうと思う。それは自分のプライドや名声を守るためではなく、本当に守るべき者のために、後世に残すべきもののために。そう、彼女は思っていた。

翌日、地球連邦軍カリフォルニア基地。

その日、基地の様子は一変した。先日まで沈黙を保っていたジオン軍の部隊が、再び侵攻を開始したのである。前回の攻撃からたったの二日後という侵攻の早さが、基地の連邦兵たちを驚かせたのと言うまでもない。

「野郎……。まさか、こんなに早く攻めてきやがるとはな……。この間のお仕置きじゃ、物足りなかったってか？」

出撃の準備を整えながら、フリッツがこぼした。

「ホント……。連中、なんでこんなに元気なんだろうねえ……」

ロツソも相変わらずの様子で皮肉な笑みを浮かべている。先日の口論のことなどはどこ吹く風といった様子で、二人を乗せたTINコッドは、着々と出撃の準備を整えてゆく。

「全機、出撃準備はいいな！？ これより我々は、ジオンの攻撃部隊を殲滅する」

「こちらフリッツ機。了解ですぜ、隊長」

「こちらロッソ機。いつでも出撃可能だ」

「アラン・スオード曹長、出撃準備完了しました」

「よし。では、各機出撃せよ」

「了解!!」

リサの指示を受け、それぞれのＴＩＮコードが滑走路から飛び立つ。目的は友軍のフライマンタ隊を援護し、地上にいる敵部隊に絨毯爆撃を仕掛けさせることだ。そのためには、敵の航空戦力であるドップやルッゲンとの戦闘がメインとなる。先日と代わり映えの無い戦い方ではあるが、セイバーフィッシュよりも対戦闘機戦に特化したＴＩＮコードであれば、それぞれが負ける気がしなかった。

「さあて……早速おいでなすつたぜ……」

前方に現れたドップの編隊を目にして、フリッツがにやりと笑った。同じ空中戦となれば、機動力はこちらも負けてはいない。

「各機、散開して敵を撃破せよ。フライマンタ隊に、攻撃を当てさせるな!」

「了解です、隊長!」

リサの指示が行き渡るのと同時に、四機のＴＩＮコードは方々に散開してドップの編隊を取り囲む。対するドップも編隊を一時崩し、

それぞれの敵に対応すべく動き出す。

だが、これがリサたちの狙いでもあった。混戦になってしまえば、ドップは自分たちとの戦いに集中せざるを得なくなる。後方に控えるフライマンタに狙いを定めることもなく、爆撃機の安全を確保することができるからだ。

「こいつ……捕らえたぞ!!」

前方から飛んでくる機銃掃射の雨を回避しつつ、アランがドップに狙いを定めて引き金を絞る。発射されたTINコードの機銃が、ドップの翼を易々と貫いた。

「くそつ、外したか!!」

翼を失ってもなお飛び続けるドップの姿を見て、アランは悪態をついた。バーニアの出力で強引に大気圏内を飛行しているドップにとって、翼の損失は大した問題ではない。そのしぶとさが、連邦軍の戦闘機乗りたちからゴキブリと呼ばれる所以である。

翼を失ったドップは、今度は反撃とばかりに空対空ミサイルを発射した。ミノフスキー粒子の散布された戦場では高性能のコンピュータ制御による誘導ミサイルは使えないとはいえ、短距離誘導の赤外線センサーなどは生きている。一度捕まってしまうば、振り切るのは容易ではない。

（フレアを撒くか……？ いや、このくらいなら!!）

迫り来るミサイルを前に、アランは機体を横に滑らせるように移動させ、直撃を回避した。当然、その後方をミサイルが追いかけて

くるのだが、それも計算のうちである。先のドップとは別のドップを発見したアランは、その機体に向かって側面から急接近を試みた。今まで、別の相手と戦っていたそのドップにとっては、正に不意をつかれたと言っても過言ではない。

「僕にはこんなプレゼントをもらう趣味はないんでね！」

そう言いながら、機体を急旋回させてドップの側面をすれすれで飛行するアラン。その急な動きに対して目標を見失ったミサイルは、あるうことが彼の目の前にいたドップに、そのまま直撃したのである。敵のミサイルを使って敵を落とす、正に神業に等しい芸当だ。

「あいつ……なんという動きをするのだ……」

アランの戦いぶりを見ていたリサが、思わず驚愕の表情で彼の機体を見つめた。残るフリッツとロツソは既に慣れたものなのか、余裕の表情でそれを見つめている。

「まったく、戦闘になると、こうまで性格が変わるやつも珍しいな。あれだけの腕を持っていながら、あいつはどうも自分に自信がなくていけねえ」

「油断するなよ、フリッツ。そういうお前は、あいつと違って自信過剰すぎるところがあるからな。調子に乗って、落とされたりしたら格好がつかないぜ」

「うるせえ！ 余計なお世話だつての！！」

互いに言葉を交わしながら、それでも巧みな操縦技術で敵の攻撃をかわし続けるフリッツとロツソ。そして、その間にも、アランは

次なる攻撃に移るための行動を開始していた。先の旋回をそのまま利用し、今度は先ほど翼の片方を破壊したドップの後方に回り込む。いかにタフな機体でも、本体に直撃させればひとたまりもないはずだ。

もともと安定性の悪いドップならば、TINコードの機動性を生かして張り付くのは簡単だった。すかさず機銃の雨をお見舞いし、蜂の巣となったドップが炎上しながら落下してゆく。

「やるな、アラン曹長。お前、本当に経験の浅い志願兵なのか？」

「ええ、そうですよ。なんだったら、帰還してから僕の経歴を見せましょうか？」

「いや、別にその必要はないが……。それでも、お前は――」

そこまで言いかけたとき、リサはハッとした表情で前方のモニターを見つめた。先の編隊とは別の隊が、すぐ目の前まで迫っていたからだ。

「残念だが、無駄話はここまでのようだな。続きは、帰還してからにさせてもらっぞ」

「分かりましたー!!」

再び現れたドップの編隊に向かい、リサとアランは気を取り直して対峙した。先ほどはアランに活躍の場を奪われてしまったが、腐っても隊長である。部下に戦いを任せきりでは、こちらとしても立つ瀬が無い。

「さて……お手並み拝見と行かせてもらうか……」

目の前に迫り来るドップに対し、リサは果敢に突撃を試みた。当然、補足された上に機銃掃射の嵐を受けることになるが、それでも彼女はひるまない。その攻撃を先読みし、一瞬、機体のエンジンをカットする。

軽い滑落感が彼女を襲い、彼女を乗せたＴＩＮコッドは、地面と水平な姿勢を保ったまま落下した。そうして攻撃を回避し、敵の下へと回りこむ。相手が気づいた時には既に遅く、リサの機体はそのまま縦方向にＵ字旋回すると、上下が逆さまになった姿勢のまま機銃の雨を放った。

一瞬のできごとに、ドップの編隊が慌てて散開する。その内の数機がミサイルを放ってきたが、それさえもバレルロールで回避し、相手に肉薄すると同時に機銃を叩き込む。ルウム戦役以前から戦闘機一筋で戦い続けてきた彼女にとっては、造作もないことであった。

「おいおい……。このままじゃ、あの二人に活躍の場を全部持つていかれちゃうぞ……？」

「まったくだね。混戦でフォーメーション通りに動けないとはいえ、少しは活躍させてもらわないとねえ……」

後方でフライマンタ隊に群がるドップやルッグンを追い払っていたフリッツやロッソは、毒気に当てられたような表情でリサとアランの戦いを見つめていた。このまま行けば、勝てるだろう。そう、誰しもが思ったときである。基地内から、突如として通信が入った。それを聞いた四人の表情が、見る間に驚愕のそれへと変わってゆく。

「こ、こちら——連邦軍、カリ——ニア——ベース。西方より、ジオンの——現在、第五エリアに——至急、応援を——」

ノイズが混じり、聞き取りにくいものではあったが、誰もが状況を理解していた。先日は第二エリアに現れたジオン軍であったが、今度は伏兵を用意し、第五エリアからも侵攻を開始したのである。今、リサたちが戦っている部隊は明らかな陽動。ジオン軍の部隊規模を過小評価し、まんまと嵌められたというわけだ。

「畜生、ジオン野郎め！ やるならやるで、正々堂々と来いってんだよ！」

苛立ちを隠せない表情で、フリッツが叫ぶ。が、戦場で頭に血をのぼらせて平静を失うのは、あまりにも危険であった。先の戦闘でドップをあらかた叩き落してしまったことも相俟ってか、彼は地上にいるMS部隊を完全に戦車と爆撃機任せにしてしまっていた。それが、命取りだったのである。

「こうなりや、手前ら全員叩き潰して、すぐに第五エリアに——」

そこまで言ったとき、彼の機体は突如として粉々にはじけ飛んだ。一瞬、他のメンバーは何が起こったのか分からなかったが、その正体はすぐに判明した。

彼らの下方から地対空攻撃を行う一機のザク。その手に握られている巨大な砲身が、先の攻撃の正体だったのだ。

「なんだよ、アレは！？ 戦車の砲塔を、そのまま長距離砲にしてるってのか！？ まったく、間に合わせと言うかなんと言うか……」

「油断するな、ロツソ少尉。敵の命中精度は、マゼラアタックやマゼラトップのそれとはえらい違いだ。MSが持っていることで、角度も自在に変えられる。過小評価は禁物だぞ」

「分かってますよ。ですが、こちらフリッツの仇も討たないのはごめんですからね。悪いけど、失礼しますよ!!」

そう言いながら、ロツソは機体を旋回させながら急降下させた。螺旋を描くように降下すれば、長距離砲で狙いを定めることは難しくなる。そうして相手の動きを封じておき、こちらの射程に入ると攻撃する。それがロツソの作戦だった。

「化け物め!! フリッツの仇だ!!」

いつもの飄々とした様子からは考えられない激しい表情で、ロツソは眼前のザクに空対空ミサイルを叩き込んだ。本来、対MS用の武器ではないが、直撃を受ければたたではすまないはずだ。攻撃が確実に命中したことを確認し、ロツソは勝利を確信した。

だが、彼のその考えは甘かった。ミサイルの爆煙が収まると同時に、その中から緑色の巨人が何事も無かったかのようにして姿を現わす。肩アーマーこそ一部吹き飛んでいるものの、分厚い装甲とシールドに守られて、本体は全くの無傷だったのだ。

「——っ!! マジかよ!?!」

あまりの出来事に、信じられないといった表情で敵機を見つめるロツソ。そして、その隙を見逃すほど、敵のザクも甘くは無い。長距離砲を投げ捨ててバーニアをふかし、ザクが上昇中のロツソの機体に接近する。そして、彼の機体がザクの攻撃の射程圏外に逃れる

よりも先に、その手に握られたヒートホークがロツソのＴＩＮコッ
ドを容易く叩き潰した。

ＭＳの装甲でさえも切り裂く一撃を食らい、ロツソの機体は空中
で二つに分裂する。切断面から炎とパーツを撒き散らしながら、分
断された機体は地面に激突して激しい炎を上げた。

「フリッツさん！！ロツソさん！！」

一瞬の出来事だった。たった一瞬で、一度に二人の仲間を失った。
そのあまりにもあっけない死に様に、アランは思わず叫び声を上げ
た。

通常兵器とＭＳの圧倒的な戦力差。その事実を、ここに来て再び
見せ付けられてしまった。やはり、連邦軍の兵器では、ジオン軍の
ＭＳに勝つことなど不可能なのだ。

「こいつ……！ 今度は僕が相手になってやるぞ！！」

仲間を撃墜されたことに逆上してか、アランは自機に搭載されて
いる空対空ミサイルを地上にいるザクに向かって乱射した。しかし、
所詮は対戦闘機用の装備である。本来想定されていない地上への爆
撃には向かず、その全てが容易く回避されてしまう。空中を高速で
飛び回る戦闘機ほどではないにしろ、ＭＳの機動性は戦車以上のも
のがあるのだ。先にロツソが見せた奇襲でも使わない限り、ミサイ
ルを当てることさえままならない。

「くそっ！！ この化け物め！！」

「冷静になれ、アラン曹長。このまま戦っても無駄死にするだけだ。

「ここは一度、引くべきだぞ」

「し、しかし……。ここで逃げても、敵にはあの長距離砲が……」

「そうだな……。普通に逃げたところで、背中から狙い撃ちされるのがオチだろう。だが、私に考えがある……」

逆上するアランをなだめるように、彼の隣を飛行しながら、リサがにやりと笑った。

「ここは私に任せ、お前は基地へと帰還しろ。そこで本隊と合流するんだ」

「り、了解です。それから先は……第五エリアの救援へ？」

「いや……。お前は本隊と一緒に、この基地を放棄して脱出するんだ」

意外な言葉だった。基地の守備隊が、基地を放棄して脱出する。それは正に、敵前逃亡に等しい行為である。仮に本隊が基地を放棄したとしても、それでは完全な敗北ではないか。アランは思わず、自分の真横を飛んでいる上官の言葉を疑った。

「隊長！！それは、いったいどういう……」

「いいから聞いている！ お前のような先進的な考えを持ったパイロットは、これからの連邦軍に必要な人間だ。だから、こんなところで無駄死にするな。ルウムやオデッサや……それに、このカリフォルニアベースで散っていった多くの仲間たちのためにも、お前は生きろ。生きて、私たちの分まで戦ってくれ……。これは、私から

お前に託す、最優先任務だ。私はお前に……お前のような兵士に未来を託す!!」

「隊長……それは……」

早口でまくしたてられ、アランは一度に理解することができなかった。様々なことが一度に起きすぎて、頭が混乱していた。だが、戦場の真っ只中で、生と死に関する話を解く。その行為がなにを意味するかは、おぼろげに理解できた。

「さあ、もう時間がない。敵もどうやら、体勢を立て直したようだ。お前は生き残った連中と共に、ここから撤退しろ」

「駄目です、隊長！ あなたは——」

そこまで彼が言いかけたとき、リサは通信機のスイッチを静かに落とした。そして、苦笑しながら機体を急降下させると、先ほどのマゼラトップ砲を構えたザクに向かい、脇目もふらずに突撃する。

「化け物め……。確かにアタシの力じゃ、あんたを倒すには役不足なんだろうけどさ……」

放たれる砲弾をぎりぎりのところで回避しながら、リサは超低空飛行でザクへ接近した。音速を超えた飛行が生み出す衝撃波が大地をえぐり、砂煙を空中に巻き上げる。

「それでも、こちらには負けられない理由があるんだよ!!」
「ロートルにはロートルの戦い方があるってことを、貴様の目に焼き付けてやる!!」

速度を落とすことなく、むしろ加速してザクに突っ込みリサのＴＩＮコッド。その姿は、正に飛翔する槍そのものである。そして、その銀色の槍の先がザクの胸部に突き刺さった瞬間、二つの機体を一際巨大な爆煙が包んだ。

「た、隊長――！」

爆発に飲み込まれたＴＩＮコッドの姿を見て、アランは思わず叫んだ。しかし、当然のことながら、返ってくる答えなどありはしない。

「どうして……どうして、そんなに簡単に死ねるんですか……。死んだら……死んだら全部、そこで終わりじゃないですか……」

爆風と共に四方に散らばった残骸を背に、アランの頬を熱いものが伝わった。生き残りのフライマンタ隊と共に帰還しながら、アランは誰に聞かせるともなく同じことを繰り返しつつばやいていた。フリッツ、ロッソ、そしてリサ。あまりにも多くの者を一度に失った。ルウムで既に経験していることとはいえ、やはり慣れるものではない。自分も、ここで死んでしまえたら、どれほど楽なことだろうと思う。

だが、それはできない相談だ。リサ中尉に託された最終任務がある以上、そして何よりも、彼の仲間たちの想いがある以上、自分はまだ死ねない。そう、自分自身に言い聞かせながら、アランは地獄のような戦場を後に基地へと帰還した。

宇宙世紀００７９年、三月十三日。その日、地球連邦軍はジオン公国軍の執拗な攻撃により、カリフォルニアベースを放棄した。これによりジャブローへの牽制手段と地球での海軍設備を手に入れた

公国軍は、その後も水陸両用型MSの開発や潜水艦部隊の設立などを行い地球侵攻の基盤を着々と進めることとなる。その後、連邦軍もV作戦によりガンダム始めとするMSの開発に成功するが、それはまだ先のことである。

公園の中央に位置する巨大な慰霊碑の前に、一人の男が立っていた。その服装からして、彼が連邦軍の軍人であることは明白である。あの戦いで亡くなった者は、軍人、民間人問わず多数にのぼる。それ故に、彼のような軍関係者の訪問も、決して珍しいものではない。

（隊長……フリッツさん……ロツソさん……それに、ルウムで散っていったみんな……）

慰霊碑の前に花束を添えながら、その男、アラン・スオードは静かに黙祷した。

一年戦争から十年以上経った今でも、地球圏から争いの火種が消える兆しはない。あの後も様々な勢力が地球圏の派遣をかけて争い、そのたびに多くの命が失われてきた。

だが、彼はそんな激戦をかいくぐり、今日まで生き延びてきた。それは単に、彼のパイロットとしての技量が優れていたからというだけではない。彼には一年戦争で亡くなった仲間から託されたものがある。それがある限り、今はまだ死ねないと思うのだ。

（隊長……。あの時、あなたは僕に未来を託すと言ってくれました

ね。正直、今になっても、とてつもなく重い言葉ですが……それでも僕は守り続けようと思います。隊長が僕に託してくれた……誇りに賭けて守ろうとしていた未来を……）

黙祷を終え、空を仰ぐアラン。この先にある宇宙では、復活したシヤア・アズナブル率いるネオ・ジオンが不穏な動きを見せていると聞く。軍上層部は相変わらず楽観的に構えているようだが、それは毎度のことである。

いざ戦いが始まれば、自分は戦場に出て、自分のできることをするだけだ。生きて、仲間の分まで戦う。その約束と彼らの誇りを守り続けるために。

時刻は既に、昼になろうとしていた。次なる戦いがそこまで迫っていることを感じながら、アランは独り公園の慰霊碑を後にした。

（後書き）

某ガンダムサイトにて、戦闘機を主役にした作品というカテゴリで投稿させていただいたものです。

いざMSが完成しても、いきなりそれに乗り換えて下さいと言われ、「はい、そうですか」と納得はできないだろうな、と思います。

量産に成功したばかりのジムがすぐさまやられ役になったり、ガンダムよりもカタログスペックの高いゲルググがエースパイロットの搭乗機以外に活躍していないのも、そういった事情があるのかもしれないと考えて作ってみました。

まあ、元戦闘機乗りや戦車乗り、学徒動員兵の寄せ集めなんかでは、連邦とジオンの区別無しに機体の性能を引き出せないんだろう、ということです。連邦軍のMS乗りでエース級の人達は、兵器の操縦における飲み込みの早い人達だったんでしょうね……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4288/>

機動戦士ガンダム ～託された未来～

2011年10月6日23時06分発行